

『フィネガンズ・ウェイク』の知の方位(3)

結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

49

(発行年 / Year)

2003-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003984>

『フィネガンズ・ウェイク』の知の方位(3)

結 城 英 雄

第2巻第2章

本章は「レッスンの章」と呼ばれ、『フィネガンズ・ウェイク』で最も難しいと言われている (*Letters*, I: 405-406)。子供の学習に関わることが描かれ、男子生徒用の昔の教科書と書込みが再現されている。本章の半ばにはユークリッド幾何学の図形も取り込まれている。中心となるのは中世の3学科(文法、修辞学、論理学)と4学科(数学、幾何学、天文学、音楽)である。前半(260-287)まで、左側の書込みはシエムで、右側の書込みはショーンによる。後半(293-308)では、左側の書込みはケヴ(ショーン)で、右側の書込みはドルフ(シエム)による。また脚注は終始一貫イシーの手による。だが、本文と子供たちの書込みや注の間に「論理」は見定め難い。最後に子供たちは両親に手紙を書く。

260-263.30

前章の最後でH.C.E.とA.L.P.は外で遊ぶ子供を迎えに出た。本章は彼らが子供を連れて戻るところから始まる。彼らの酒場は霊廟と記述されている。疲れのためか、H.C.E.は変容し、A.L.P.が傍らに付き添っている。語り手たちはH.C.E.にまつわる詳細な情報に関心を示す。場面はチャペリゾッド。明かりの点されたその酒場/霊廟は、宿屋でもあり、劇場でもある。その主人H.C.E.は容貌こそ変化すれ、かつてお馴染みの人物である。

*掃路については詳細に記述され、それぞれ歴史、言語、神学、天文学、哲学、絵画、音楽、歴史についての権威ある学者の名が使用されている。それは子供たちが地図の勉強をしていると考えられるが、同時にこれから展開する学芸をも示唆している。

*酒場が「霊廟」(261.13)であるのは世界の七不思議の一つ、ハリカルナッソスの塔墳墓になぞらえられているからである。その他の6つの不思議はそれに先行する261.9-12を参照 (cones, mured, pensils, olymp, dianaphous, culosses)。

264-266.19

周囲の様々な美しい景色が点描された後、酒場の位置が特定される。それはダブリンの西、チャペリゾッド辺り、近くにはリフィ川が流れ、橋が架けられている。この地域は美しく和やかな雰囲気にはれている。酒場の中に入り、くすんだランプの明かりの中、階段を昇ると、二階の子供部屋に着く。

*チャペリゾッドは1905年から1933年にかけてほとんど変動がなく、約225軒、1,280人ほどの地区であったという。川をはさんで酒場の真向いには『ダブリンの市民』所収「痛ましい事故」中のミスタ・ダフィの間借りしていた家がある。その物語もトリスタンとイゾルデの伝説を背景にしている。

266.20-275.2

二階の勉強部屋にはイシー、シエム、ショーンがいる。イシーはソファに腰掛け、歌いながら編み物をしている。芽生え始めた彼女の心を捕らえているのは性のことや自分に心を向けてくれる男の子のことである。その一方、シエムとショーンは歴史の勉強に励んでいる。彼らの学んでいるのは皇帝ナポレオン、ハンニバルのアルプス越え、イスラム教、ダゴベート一世のことなどである。

*読者の案内役をしてくれるのは四導師であるらしい。物語は“we”で伝達される。

*ダゴベート一世 (602?-639) はフランスの王 (628-639)。

275.3-279.9

視点が変わり、一階のH.C.E.とA.L.P.に焦点が向けられる。彼らは自分たちの来歴を振り返りながら、あれこれ話しあっている。二階では子供たちが勉強に励んでいる。辺りも暗くなった。蛙の合唱も止み、山羊や羊も囲い込まれ、蝙蝠たちが飛びかうだけである。一日の黄昏のように、人生にも黄昏がある。H.C.E.も亡くなるであろう。それはちょうど犠牲の儀式にも等しい。こうして美しいイシーへと視点が転じられる。彼女の心を捕らえているのはやはり性の

問題らしい。語り手たちは雨や寒さに不平をもらす。

* 279ページの脚注にはイシーの手紙が転載されている。

280-282.4

再び、二階の勉強部屋を覗いてみる。イシーがシェムとショーンの注意を引き付けようとするが、彼らには彼女のことがわからない。彼女が語りたいのは、愛がすべてであり、平和が人生であり、花々にこそ美が宿っているということなのである。

* 中ほどに挿入されているフランス語の記述はボストンからのマギーの手紙に類似している。

282.5-304.4

シェムは小さい頃には計算が得意であったが、長ずるにつれ、読み書きの才能とは反比例して数学の成績は良くなかった。その彼の前に立ちはだかっているのがユークリッドの幾何学初歩の問題で、彼はショーンにその説明を始める。問題は正三角形の作成である。これはコンパスを使用することによって簡単に書けるが、途中で混乱し、彼らは問題を放棄する。

* シェムは正三角形を母親のデルタになぞらえる。

* ジョイスが性的問題に関心があったことを指摘しているのはマーガレット・サーモンである。彼女の著書のタイトル“Eternal Geometer”はテキストの296.31-197.1を参照。

304.5-308.24

子供たちは両親に手紙を書く。それは「夜の手紙」と題され、そこには両親の死が暗示されている。

第2巻第3章

本章は【フィネガンズ・ウェイク】で最も長い章である。H.C.E.の酒場が舞台で、子供たちもA.L.P.も二階に上がり、酒場でH.C.E.が客の応対をしている。客たちは酒を飲むことで酒場を食いつぶし、駄弁により主人の世評を傷つける。しかし象徴的に読むならば、H.C.E.は瀕死の神であり、客たちの飲食は神食(ホスチア)と呼ばれる古来ギリシアの儀式に相当する。その意味で、H.C.E.は酒場の主人、建築家、フィネガン、ギデオン、船乗り、ノルウェイの船長、

仲人と変容する。

そうした合間に挿入されているのが4つの逸話である。それらはノルウェーの船長と仕立屋のカーズの話（309-338.3）、バックリーとロシアの将軍の物語（338.4-359.16）、H.C.E.の自己弁護と四導師の判決（359.17-370.29）、H.C.E.の物語である（370.30-382）。またH.C.E.の物語はさらに、デイルムッドとグラニーヤの神話（370.30-380.6）、およびアイルランド最後の上王ローデリック・オコナーの話（380.7-382）に分けられる。酒場は次第に船の様相を呈し、次章のトリスタンとイゾルデの船出へと続く。

309-311.20

ギネス・ビールはさておいて、H.C.E.の酒場に電気設備が導入された。客たちは夜毎この家に集まり飲食を楽しむ。彼らの祝杯は「われわれ自身のために」である。

- * 「われわれ自身のために」とはアイルランド独立を願う政治結社、シン・フェインの標語（英語）。H.C.E.は「酒場であふれる戦場の主人」（310.26）。

311.21-315.08

ラジオ放送で、ノルウェーの船長と仕立屋の話が流れてくる。ある日、船長が船舶管理人に仕立屋の所在を問い、船舶管理人が仕立屋を紹介する。うまい具合に衣服があつらえられ、船長は航海に出る。船舶管理人が船長を盗人呼ばわりするが、船長が彼への礼を忘れたためか。彼の後を追うのは若きカーズである。そしてドーンという音に呼応するかのようには雷鳴が轟く。

- * ジョイスはノルウェーの船長と仕立屋の話を父親から教えてもらった。せむしのノルウェーの船長は仕立屋のJ・H・カーズに背広を注文することになるが、出来上がった品は船長に合わず、船長は体に合わせた背広が縫えないと仕立屋を怒鳴り、仕立屋は背広に合わない体をした船長が悪いと応戦するという物語である（エルマン『ジェイムズ・ジョイス』参照）。「服」には象徴的な意味が込められているらしい。またこの逸話は「ヤール・ファン・フーサー伯爵とブランクイーン」の物語と同じ三部構成。さらにノルウェーの船長と仕立屋はそれぞれヴァイキングとダブリンの商人を象徴。

- * 雷鳴は7度目。H.C.E.が階段でつまづいた様子の暗示である。彼は死と復

活の原型，フィネガンと重なる。

315.09-320.32

船長が7年振りに再び戻って来た。艱難苦難の航海であったとか。彼の登場は船の入港そのままであるし、彼の帰国はフィネガンの復活にもなぞらえよう。船舶管理人が彼を迎え、挨拶し、海底に沈んでいたのではないかと心配していたと伝える。船長はぶっきらぼうに返答し、空腹ゆえ、チーズか七面鳥がないか尋ねる。その一方で、船長と仕立屋の会話も聞こえる。仕立屋はせむしの船長に合わせる服は作れないと主張し、船長は裁縫の腕がないと仕立屋を罵倒する。こうして船長は再び出発し、またしても船舶管理人が彼を盗人呼ばわりする。

*船長と仕立屋の会話は船長の語りとも解釈できよう。

320.33-324.17

仕立屋が競馬から戻って来る。彼は白い帽子を被っていて、三人の客からそれを脱ぐように命じられる。彼は船長の悪口を語り、アイルランドと言わず、世界中のどこでも、あのような瘤を持つ人物の衣服を作れる仕立屋はいないと息巻く。この喧騒の折、船長が再び戻る。三度目の来訪で、客たちは彼を歓待する。

324.18-331.36

船舶管理人は船長に義理の父親が欲しくはないかと問い、その一方で仕立屋に義理の息子を探してあげたいのだからと語る。こうして彼は船長と仕立屋の仲立ち役となる。問題となるのは船長の改宗であるが、彼がカトリックに転じてくれ、それも好都合な結果に終わる。早速、船舶管理人は結婚の取り決めにかかる。そもそも仕立屋の娘はこの上なく美しく、ロマンスを夢見ているらしい。船長と仕立屋の娘の結納も整い、船長と仕立屋の確執も水に流され、周囲の祝いに囲まれながら、結婚式が挙行される。

332.1-337.3

かくして二人の結婚生活が始まった。折しも、彼らの生活を暗示するかのように雷鳴が轟く。そして人間の古代の戦いのイメージが点描され、その後三つの中断が幕間のように挿入される。まず、女中のケイトが登場する。彼女はH.C.E.にA.L.P.からの伝言を話す。ベッドへの誘いである。次に、H.C.E.のフ

イーニックス公園での原罪を暗示するようなイメージが点描される。最後に、H.C.E.が客を楽しませるため、面白い話しを始める。

* 雷鳴は8度目。新婚夫婦の性行為の暗示とも読める。

337.4-338.3

次の節への導入。酒場でH.C.E.が客に飲み物を給仕し、その合間に子供たちにはミルクを与えている一方、客たちはフィーニックス公園での彼の原罪を想起させるような話題に興じる。客たちの話に登場するバラ、どもり、ロブスターなどは二人の娘、H.C.E.、3人の兵士に相当する。そして彼らの話はバックレーとロシアの将軍の物語へと転ずる。

* ロブスターは赤い服のイギリス兵。

338.4-354.6

バックレーがロシアの将軍を撃つ話はバットとターフが演ずるテレビ放送である。クリミア戦争の折のこと、アイルランドの義勇兵バックレーは敵のロシアの将軍を見かける。将軍はおもむろにズボンを下ろし脱糞をする。義勇兵はその姿に撃つことをためらう。だが、将軍が芝の塊で後始末をするにおよび、義勇兵はすかさず撃つ。アイルランド人の義勇兵には芝の塊が祖国の泥炭に思われ、侮辱されたと感じられたのである。

* ジョイスはバックレーとロシアの将軍の話も父親から教えてもらった（エルマンの『ジェイムズ・ジョイス』参照）。その話しは史実にはない。

* バットはシェム、ターフはショーンの変奏。バックレーとロシアの将軍の対立は父と子の対立の意で、エディプス=コンプレックスを伏在する。

* クリミア戦争（1853-56）はトルコ領内の要地、エルサレムの管轄権をめぐるロシア対トルコ・イギリス・フランス・サルディニアの戦い。パリの講和条約で停戦、ロシアの南下政策は挫折した。クリミア半島、セバストポリ南東、バラクラバ（Balaklava）における「軽武装隊の突撃」は有名。クリミア（Crimea）は罪（crime）を示唆。またバラクラバはダブリンのゲール語名 Baile Átha Cliath（Balaclee-e）と重なる。

354.7-355.7

バックレーとロシアの将軍についての話の補遺。バットとターフは一人の人物に溶解し、反逆の歌の断片がモザイク模様を描く。バックレーによる将軍の銃

撃は復活祭蜂起の銃撃戦とも重なるらしい。平和が訪れ、人々は握手を交わし、手回しオルガンでアイルランドの歌曲が奏でられ、友情が宣誓される。幕が下り、芝居も終わる。

355.8-358.16

ここで、話題はH.C.E.のことへと転ずる。彼は聴衆に人間とは過ちを犯す存在であり、罪を免れている人はいないと主張する。人間は失樂園という荒野を彷徨っているのである。彼はそうした過ちの例をいくつか引用し、その過程でつゆしらず神のような立場へと高揚する。さらに彼は、嘘発見器や自白薬などもあるが、自分について語られている中傷には真実のかけらもない、そもそも中傷を免れる人間はいないし、自分もそうした人間の一人であると語る。

H.C.E.は聴衆に向かって、「罪を犯しながらながらも人間である理由は？」というシェムの謎にも似た謎を問い、一つの逸話を話して聞かせる。それは彼がある書物を読んでいたときの事である。美しい挿し絵に飾られた書物で、便所に腰を下ろし、そのページに見惚れていると、彼には遠縁の人々のこと、定かならぬありし日の場面が想起され、心が高まったという。

* シェムの謎は170.5を参照。人間が同類であると語ることで、H.C.E.は「人間はみな好色である」と言いたいのだろう。

* H.C.E.が見惚れていた書物はピアズレー (357.2-3: Mr Aubeyron Birdlay) の「サロメ」。彼が便所で想起した遠縁とは彼の息子と娘、ありし日の場面はフィーニックス公園での出来事。彼の便所の場面には【ユリシーズ】第4挿話のブルームが重なる。

358.17-359.16

H.C.E.は話し終わると自分の仕事に取りかかり、酒場はいつしか船へと変容し始めている。客たちは彼の話に感銘するどころか、一様に、死んでしまえとか、罪はおまえ一人のものであると叫ぶ。

359.17-361.34

そこでラジオ放送が流れる。それはジョン・ホイストンやエーリック・ホイグズの作品の抜粋である。さらに放送は続き、聴衆はアナウンサーの声が腹話術であることを感知する。話題はH.C.E.に関わる事柄のようである。

361.35-367.7

客たちはH.C.E.が持ち場を離れている間、なおも彼を誹謗する。彼らの話題はH.C.E.が行なったこと、彼の妻A.L.P.のこと、彼ら夫婦の暮らし振りなどである。そこにH.C.E.が戻り、自らに下された中傷に対し、無実の申し立てをする。それは感動な瞬間でもある。彼はこう説明する。自分に罪があるとしても、否、その事実を打ち消すつもりもないが、これまでの生涯における善行がその罪を駆逐しないだろうか。人々は他者の不潔な側面のみを見るが、自分はそのような卑劣な事態に甘んじるよりは死を選択する。

H.C.E.はここで唾棄しながら、さらに言葉を続ける。わたしは一つの罪を犯したかもしれないし、また別の罪も犯したかもしれない。だが、無実の娘たちを巻き込む罪などには関与してはいない。彼女たちがそのような申し立てをしているのなら、それは濡れ衣である。わたしは生れついでに紳士でもある。そのようなわたしが罪を犯すはずがない。どんな証拠があるのでしょうか。すべては神のみの知る事。3月15日が良き日であることも。

* H.C.E.とA.L.P.の暮らしの記述にはロワントリーの『貧窮生活』が利用されている。この書は十九世紀のイギリスに関する分析であるが、同時代のアイルランドにも適用できる。

367.8-370.29

H.C.E.の弁明の後、四導師が登場する。今や、酒場は船であり、ノアの方舟でもあり、洪水の中を漂っている。四導師は12の戒めを語り、彼らは以下の所信を表明する。(1)A.L.P.がシエムの助言で手紙を書いた、(2)イシーが手紙を待ちわびている、(3)ショーンが手紙を配達に出かけた、(4)イシーはトリスタンに感謝している、(5)あれ(考えられないこと)、(6)あれ(存在したこと)。どうやら、四導師の所信は情報のごたませという様相を呈している。酒宴の終わりも近づいた。

370.30-373.12

さて、洗いごとをしていたシガーデンが登場し、閉店の時刻を告げる。彼は客に早く帰ってもらいたいが、客たちはもう少し飲みたい素振りで、ホステイが彼を嘲る歌を歌う。H.C.E.が両者の仲立ちとなり、閉店を宣言するが、それでも客は帰ろうとしない。しかし酒場は船へと変身する。リフィ川に繫留され、

まさに出航間際の体である。客たちは慌てふためき帰途につくが、浮かれた4人の男は酔い痴れ、川に落ちてもがく。乗船用の歩み板が外され、錨が揚げられる。

373.13-378.19

この様子を目にし、川辺に投げ出されたらしい酔漢たちはH.C.E.を誹謗中傷する。せむしのリチャード3世とか豚の飼い葉桶といった悪口にくわえ、営業免許を停止せよ、投獄しろなどといった恐喝、さらにはその悪業が新聞に書かれようなどと凄む。

*酒場の営業時間は厳格。規則を破ると免許停止となる。

378.20-380.6

客たちは一丸となってフィアナ騎士団になりすまし、H.C.E.は若きフィンカディルムッドと名称される。絞首刑のロープも、さらには棺も用意され、銅像も建てられことになろう。だが、H.C.E.は死んではいなかった。辺りは暗くなり、船も川を下り始めた。

*老王フィンと若き王女グラニーヤの披露宴の晩、ディルムッドは、彼に好意を持つグラニーヤに誘われ、彼女と逃避行する。だが、彼は猪に倒される定めにあった。

380.7-382

H.C.E.は酒場で一人きりになった。彼はアイルランド最後の上王、ロデリック・オコナーに変容する。彼は客の飲み残しを集め、それを飲み下す。彼は眠りに入る。

*ロデリック・オコナーはイギリスのヘンリー二世軍との戦いで敗北し、以後、イギリスの支配地域 (English pale) の外側の地域の支配権のみ認められた。

*残った酒を飲み干すH.C.E.はミサの後に全質変化した葡萄酒を飲み干す司祭に対応。

*【フィネガンズ・ウェイク】は聖週間 (復活祭前の1週間) の聖木曜日から聖金曜日にかけての出来事。

第2巻第4章

客の飲み残しで酔い痴れ、H.C.E.の心は夢の船に乗り出帆する。その夢はトリスタンとイゾルデの新婚旅行を思い描く。そして彼の体は床に横たわり、マーク王の位置にあるが、その心は夢を通して若々しくよみがえるらしい。新婚旅行の船を取り囲むのは波や鷗であると同時に、最後まで残ったママルージュと呼ばれる4人の酔客でもある。彼らが主人公の夢の目撃者であり、物語は彼ら語り手を媒介に伝えられている。

本章は『フィネガンズ・ウェイク』で最も短い章とされている。ヴィーコの歴史観では「混沌」の時代に相当し、世代交替が含意されている。前置き、語り手による導入、ママルージュによる回想、語り手の結論、後書きという順に展開する。四導師を観客と見るなら、劇中劇という捉え方もできる。中心となる「トリスタンとイゾルデ」と「ママルージュ」の物語は、1923年に既に書かれ、テキスト全体の核として融合する予定であった。(Letters, I: 241)。

383.1-383.14

枕に配置されているのはイタリックの詩。「クオーク」という鷗の合唱で始まり、不能の老人マーク王が擲擲される。若いトリスタンがダブリンのチャペリゾッド（イゾルデのチャペル）の麗女イゾルデを娶り、床入りをさせ、マーク王の地位は奪われるだろうと語られている。

* アメリカの物理学者のMurray Gell Mannは1963年、本章冒頭の「クオーク」という造語を用い、陽子や中性子など一群の素粒子の構成要素をなす粒子を説明した。

* 「トリスタンとイゾルデ」の物語はワーグナーのオペラで有名であるが、ジョイスはジョゼフ・ベディエのフランス語版（1918）を使用したと言われている。コーンウォールのマーク王の命により、甥のトリスタンは王の妃となる女性、イゾルデをダブリンに迎えに行くが、帰路、惚れ薬を飲み、彼女と恋に陥り、二人はマーク王の追撃を受け、不幸な結末に終わる。ベディエはこの基本的な物語に、4人の嫉妬深い豪族などの人物も配置している。トリスタンのアイルランド来島については第1巻第1章（3.04）を参照。二人の愛の背後にはアイルランド女性とその女性を支配するよそ者としてのイギリス人の構図も認められよう。

383.15-386.11

詩は鴫と同時に4人の人物(H.C.E.の分身)の合唱であろう。4人とは四導師であると同時に、ママルージュ(397.11: Mamalujo)と総称される4人の福音伝道者(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)のことである。彼らは神へ感謝し、食膳の祈りを捧げる。その彼らの耳もとは波の音が、キスの音が聞こえてくる。それはトリスタンとイゾルデの交合の音であるという。彼らが睦み合っているのは船の女性船室長。トリスタンは六フィートのフットボールの選手で、彼はフットボールの試合のように彼女を攻め立てる。4人はそのような若い男女をピーピング・トムのように窺視しながら、彼らも昔日の自分たちの若き時代を回想する。ダイアン・ブーシコーの劇、『アラー・ナ・ボーグ』なども思い出の一つである。

- * 歴史家としての四導師は裁判官、検閲者、立法家としての役割を果たしている。トリスタンとイゾルデをめぐる彼らのセレナードはジョージ・ムア、AE、ショー、イエイツたちの作品にも見いだされる。
- * 若者としてのトリスタンは新世界やアイルランドを征服したノルマン人のサー・アーモリー・トリストラム(ホース城の所有者セント・ロレンス家の初代当主)にも重なる。
- * 「アラー・ナ・ボーグ」とは「キスのノーラ」の意。ノーラは乳兄弟を危機から救出するため、キスにかこち情報を与える。

386.12-388.9

ジョニー(ヨハネ)による回想。競買、学生時代、ダブリン・ホース・ショー、デイル通り、コレッジ・グリーンなどの思い出などとともに、マーチン・カンガムの溺死、主人の娘と恋仲になる執事の映画のことなど、とりとめもなく想起される。これらの回想の後、トリスタンとイゾルデの話に戻るが、それも束の間、愛人宅から抜け出すパーネル、銃を所持するごろつき、二人の女性を相手にするナポレオンのことなどが入り交じり、混乱の様相を呈する。回想者はダブリンやH.C.E.のことなどに憑かれ、トリスタンとイゾルデのことなど語れないらしい。

- * Jonny MacDougallはヨハネ、コナハト地方、鷲の表象。
- * 回想の混乱は逆綴りや性の逆転にも現れている。Kram of Llawnroc (Mark

of Cornwall), Wehpen (nephew), luftcat revol (lover tactful), natsirt (Tristan) /helaidies, Battersby Sisters (Battersby Brothers)。そもそも Mamalujo はマタイから始まる。これらは秩序の転倒, 逃亡, 偽装といった「トリスタンとイゾルデ」のテーマとも結びつく。ちなみに, 二人の物語はパーネルとオシー夫人の密通とも重なる。ジョイスはジョージ・ムア作の姦通物語, *Memories of My Dead Life* (1906) を所持していた。

* カニンガムは『ダブリンの市民』や『ユリシーズ』にも登場する。溺死の情報は初出。

388.10-390.33

マーカス (マルコ) による回想。彼はジョニーの回想を変奏しながら反復する。たとえば, オランダの無敵艦隊は水没し, カニンガムは帰郷 (カミングホーム) し, 銃を所持するごろつきは銃を所持するバックレーになる。同様に, H.C.E. (マーク王) はショーン (トリスタン) に, A.L.P. はイサベル (イゾルデ) に変容する。若い H.C.E. はナポレオンを敗北させたウェリントンやデーナー人を撃退したブライアン・ボルーにも重なる。だが, 罪を抱える老いし H.C.E. と彼の救出に勤しむ妻の A.L.P. のことも背後に揺曳する。トリスタンとイゾルデのことも僅かながら言及されている。

* Marcus Lyons はマルコ, マンスター地方, ライオンの表象。

* 数字の 1132 (復活と失墜の意) と 1169 (ストロングボーの 아일랜드 上陸の年) が散見する。

390.34-393.3

ルーカス (ルカ) による回想。彼はヨハネとマルコの回想を変奏しながら反復するが, トリスタンとイゾルデへの言及はない。彼はむしろ H.C.E. と A.L.P. を中心に語る。H.C.E. が若かりし日に A.L.P. に靴紐を結ぶように命じられたこともあったことを想起する一方, 老いし H.C.E. は慈悲の聖母病院で息をひきとり, 酒場で通夜が行なわれ, 埋葬されると語る。

* Luke Tarper はルカ, レンスター地方, 牡牛/小牛の表象。

* 慈悲の聖母病院は『ユリシーズ』のブルームの家の近くにある。女性の靴紐を結うことも彼の性向 (第 15 挿話参照)。

393.4-396.33

マット（マタイ）による回想。H.C.E.は変容するが、A.L.P.は不変であるという。しかし、マットの関心がトリスタンとイゾルデに向けられていることは間違いない。彼は双眼鏡で二人のハニームーンを窃視しているのである。「死者の書」や聖体の教えで語られる復活を信じることができるなら、歴史にもそうした円環が読み取れよう。

* Matt Gregory はマタイ、アルスター地方、人／天使の表象

* 1922年にH. Carterにより発掘されたツタンカーメン王の墳墓のことが逆綴りで言及されている（Nema Knatut）。385.4: Twotongue Commonも参照。

396.34-398.30

語り手が4人の話をまとめる。四導師たちは自分たちに記憶力がないことを嘆き、彼らが亡くなったことや、彼らの回想が『四導師の年代記』として編纂されたことなどを説明する。そしてトリスタンはH.C.E.として復活するという。

* 歴史家の記憶力が定かでないという指摘は歴史の虚妄を突くものである。

たとえば、マットはイゾルデが金髪であることを忘れ、「赤い髪」(396.10)と回想している。ジョイスの念頭にあるのは「歴史」と対照的な「神話」の存在であろうか。

398.31-399

イゾルデを乗せた船が出航し、四導師は彼女への愛の歌を合唱する。彼らの4つの歌はアイルランドの4州を表象する。驢馬のいななきで幕が下りる。

* 驢馬は次の章に四導師と登場。

第3巻第1章

第3巻は「人々の部」と称され4章の構成である。第1章では寝入ったH.C.E.が驢馬の形を借りてショーンのことを語るという設定である。それらは大衆からの質問とショーンの回答という形式になっている。総計14組（*Letters*, I: 214）。14とは十字架の道行きを踏襲したものである。ショーンの説明にはシエムへの敵意が込められ、時とすると回避的に語られこともある。14の十字架の道行きには樽に入り、リフィ川を流れるショーンの姿も重なる。

403-409.7

真夜中の鐘が時を告げる。様々な言葉で人々がその数を唱える。夢の主体は H.C.E. で、彼には周囲のざわめきが聞こえる。人々はショーンを褒めたたえているらしいが、彼は驢馬の姿に身をやつし、ショーンの食習慣のことなどを語る。そこへショーンははりりしく登場し、シエムへの慈しみの感情やイシーへの敬愛などを吐露する。

* 語り手自身が自らを驢馬と告白している (405.06)。

* 時は既に金曜日 (407.29-30)。

409.8-409.30

第1の質問：誰が彼に手紙の配達を許したか？ ショーンは全員から認められたと答えるが、彼の関心事は郵便配達袋である。重い袋のため、疲労に襲われ、膝や背骨に痛みを覚え、おまけにその身を横たえるベッドも固いという。だが何よりも悪いことに、人々との出会いから自己嫌悪に陥っているという。

* 質問者である語り手は “we” を、回答者であるショーンは “I” を使用。

どうやら語り手は四導師で、回答者の声色はイシーのそれであるらしい。

409.31-410.19

第2の質問：彼の郵便配達夫の仕事は天命によるものか？ ショーンが答えるところによると、彼の仕事は天職であり、世襲的なものであるが、天候の悪い日の配達の際など、絶望感に襲われるという。溶岩の中に身を投ずるか、川で溺死するか、大海原の奥底に沈もうかと思うこともある。彼は、実際、当初から郵便配達という仕事には辟易しているという。

* 自分の仕事が天職であるという暗示はカエサレアのエウゼビウス (263?-c340)、さらにはその福音書を転載する『ケルズの書』による。

410.20-410.27

第3の質問：例の忌まわしい手紙の運び屋はショーンでなければならぬのか？ 彼の答えは手短かで、彼にその力があるからと語る。

410.28-411.21

第4の質問：彼が最も仕事を有能にこなせるのはどこか？ この問題をめぐり、ショーンは健脚で、一日走り回っている旨を述べる。だが、彼の天職はむしろ説教にあり、常日頃ロザリオを唱えてもいると言う。信頼できないなら舌

を見てくれと迫る。

* ショーンの答えには『ハックルベリー・フィン』への引喩が認められる。

411.22-412.6

第5の質問：街のポストを緑に塗ったのは彼か？ ショーンは笑いながら、その事実を白状する。イギリス人の赤いポストなどとんでもない。彼の所業を非難する人もいるが、それは啓示によるものである。非難する人々は「恐ろしいフロイト的過ち」(411.36)を犯していると述べる。

412.7-413.26

第6の質問：あなたはすばらしい歌詠み人であるが、緑が消えると思うか？ ショーンはその心配は無用であると断言するが、ただ山羊による郵便物の被害を問題化する必要があるという。

413.27-414.13

第7の質問：風変わりな制服について説明してくれないか？ ショーンはほくそ笑みながら、ロマンティストであることを自慢し、さらにお金を無駄使いせず、姪や甥に与えていると言う。そして彼は制服をギネス・ビールの樽に譬える。

* 「樽」とは手紙の封筒のこと (413.31: softbodied fumiform)。

414.14-419.11

第8の質問：歌いなさい。ショーンはこの質問に応じられず、咳払いし、それに呼応するかのような雷鳴の轟きの後、「アリとキリギリス」の寓話を語る。これはラ・フォンテーヌの賢明なアリと奢侈なキリギリスの物語に依拠し、キリギリスは病気になり、家を食べ尽くしてしまい、アリはお金の大切さを説くという設定である。アリとキリギリスはそれぞれ空間と時間を暗示している。キリギリスの歌の後、ショーンは空間と時間という両極の総合を唱えるかのように、「アーメン」と結ぶ。

* 雷鳴は9度目。雷鳴は「咳払い」にまつわるドイツ語、ラテン語、イタリア語、フランス語、ウェールズ語、ギリシア語、ロシア語などで構成。

* 「アリとキリギリス」の寓話は第1巻第6章の「ムークスとグライプス」の寓話(152.15-159.18)の変奏である。アリとキリギリスはそれぞれ空間と時間に憑かれているが、それはショーン(ムークス)とシテム(グライプス)、ウインダム・ルイス(415.29: windhame)とジョイスの対立も暗示

している（『時間と西洋人』）。アリとキリギリスはOndt（「悪」の意のデンマーク語／もしくはdon'tの変形）とGracehoper（「優雅を望む人」の意）で、それぞれantとgrasshopperをもじっている。エルマンはシエムとショーンの対立をジョイスと弟スタニスロースの対立に比している。

*この箇所は昆虫や哲学者への多くの言及を含んでいる。

*キリギリスの歌はゴールドスミス の詩、「報復」の韻律の模倣。

419.12-421.14

第9の質問：ショーンはシエムのH.C.E.に関する手紙を読むことができるのか？ 回答は「イエス」であり、ショーンに読めないものはないと宣言する。彼は自らの知識を披露するかのよう、過去の文筆家へ言及する。だが、手紙を開封することはできないので、その代わりに彼は封筒の断片を読み聞かせる。

*過去の文筆家にはワイルド、グレゴリー、マンガ、ポー、チャールズ・ベギー、チャールズ・ルーカン、パーネルを誹謗した「犯罪と名誉毀損」と題する記事を書いた『タイムズ』紙の記者、ルイス・キャロルなど。

*封筒の断片はかつてジョイスがダブリンに住んでいた家の誤った住所。

421.15-422.18

第10の質問：ショーンが書くものはシエムのものと比較してひどすぎないか？ ショーンはその批判はシエムに由来すると否定し、シエムこそ諸悪の根源であると締め括る。

*質問にはピゴットが使用した言葉、hesitancy (421.14) などが取り込まれ曖昧。答えの中には『ユリシーズ』の海賊版を出したアメリカの雑誌、『二つの世界』（422.16）への言及もあり、シエムへの誹謗にジョイスの誹謗が重ねられている。

422.19-424.13

第11の質問：寓話を用いた手紙の解明してくれないか？ ショーンによると、手紙はH.C.E.が2人の娘と3人の兵士と関わったところに端を発し、A.L.P.がシエムに弁明を書かせた結果であるという。だが、そもそもシエムの手紙の文体はショーンの文体の剽窃であるという。そして彼はシエム＝ジョイスを戯画化してみせる。

* 寓話は *esiop's foible* (422.22) で、そもそもがもじり。

424.14-424.22

第12の質問：ショーンはシエムになぜ敵意を現わにするのか？ ショーンはシエムの言葉が嫌いだからと答えるが、芸術家の言葉を恐れてか、十字を切ると、折しも雷鳴（放屁）が轟く。

* シエムの言葉はヴィーコの指摘する「祖語」(424.17) に相当。

* 雷鳴は10度目で、テキストで最後の雷鳴。101語より構成、北欧神話のトートを内包している。

424.23-425.3

第13の質問：その手紙へ匹敵するものが書けるか？ ショーンは手紙が捏造されたもので、自分こそ本当の言葉であると宣言する。彼の身振りにはどことなく救世主の相貌が感じられる。

425.4-426.4

第14の質問：シエムよりも良い手紙が書けるか。ショーンは自らの正統な書物はシエムの手紙をはるか凌ぐが、そのような手間をかける必要がないと答える。

426.5-428

最後に、ショーンは涙を流し、母親に呼びかけ、その姿を消す。イシーが彼の不在を嘆く。彼はインドかアメリカに出かけたのであろう。彼も「灰いろ雁」の一人なのだろう。だが、語り手は彼の復活を期待する。

* ショーンは樽に入っていることから、眠りながら、川を流れいったとも読める。

参考文献

- Atherson, James S. *The Books at the Wake: A Study of Literary Allusions in James Joyce's "Finnegans Wake."* New York: Viking, 1960.
- Begnal, Michael H. *Dreamscheme: Narrative and Voice in "Finnegans Wake."* Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, 1988.
- . and Eckley, Grace. *Narrator and Character in "Finnegans Wake."* New Jersey: Associated University Presses, 1975.
- . and Senn, Fritz, eds. *A Conceptual Guide to "Finnegans Wake."* University Park, Pa.:

- Pennsylvania State University Press, 1974.
- Benstock, Bernard. *Joyce-again's Wake: An Analysis of "Finnegans Wake."* Seattle, Wash.: University of Washington Press, 1965.
- Bowen, Zack, and James F. Carens, eds. *A Companion to Joyce Studies.* Connecticut: Greenwood Press, 1984.
- Brivic, Sheldon. *Joyce's Waking Women: An Introduction to "Finnegans Wake."* Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1995.
- Campbell, Joseph, and H. M. Robinson. *A Skelton Key to "Finnegans Wake."* New York: Harcourt, Brace, 1944.
- Connolly, Thomas E., ed. *Scribbledehobble: The Ur-Workbook for "Finnegans Wake."* Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1961.
- Deane, Seamus. "Introduction to *Finnegans Wake*" in *Finnegans Wake*. Harmondsworth, England: Penguin, 1993.
- DiBernard, Barbara. *Alchemy and "Finnegans Wake."* Albany, N. Y.: State University of New York Press, 1980.
- Glasheen, Adaline. "*Finnegans Wake* and the Girls from Boston, Mass." *Hudson Review* 7 (1954): 89-96.
- . *Third Census of "Finnegans Wake": An Index of Characters and Their Roles.* Berkeley, Calif.: University of California Press, 1977.
- Gorden, John. "*Finnegans Wake*": *A Plot Summary.* Dublin: Gill and Macmillan, 1986.
- Groden, Michael, general ed. *James Joyce Archive.* New York: Garland, 1977-79.
- Hart, Clive. *A Concordance to "Finnegans Wake."* Minneapolis: University of Minnesota Press, 1963.
- . *Structure and Motif in "Finnegans Wake."* Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1962.
- Hayman, David, ed. *A First-Draft Version of "Finnegans Wake."* Austin, Tex.: University of Texas Press, 1963.
- . "Nodality and the Infra-Structure in *Finnegans Wake*." *JJQ* 16 (Fall 1978): 135-49.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture.* Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986.
- Higginson, Fred H, ed. *Anna Livia Plurabelle: The Making of a Chapter.* Minneapolis: University of Minnesota Press, 1960.
- Hofheinz, Thomas C. *Joyce and the Invention of Irish History: "Finnegans Wake" in Context.* Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Joyce, James. *Finnegans Wake.* New York: Viking, 1939.
- McCarthy, Patrick A. *The Riddles of "Finnegans Wake."* Rutherford, N.J.: Fairleigh Dickinson University Press, 1980.
- McHugh, Roland. *Annotations to "Finnegans Wake."* Baltimore, Ind.: Johns Hopkins University

- Press, 1980.
- . *The Sigla of "Finnegans Wake."* Austin, Tex.: University of Texas Press, 1976.
- McLuhan, Eric. *The Role of Thunder in "Finnegans Wake."* Toronto: University of Toronto Press, 1997.
- Mink, Louis O. A "*Finnegans Wake*" *Gazetteer*. Bloomington, Ind.: Indiana University Press, 1978.
- Norris, Margot. *The Decentered Universe of "Finnegans Wake.": A Structuralist Analysis*. Baltimore, Md.: John Hopkins University Press, 1974.
- Rose, Danis, ed. *The Index Manuscript: "Finnegans Wake" Holograph Workbook VI. B.46*. Colchester, England: A Wake Newslitter Press, 1978.
- , and O'Hanlon, John. *Understanding "Finnegans Wake": A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland, 1982.
- Solomon, Margaret C. *Eternal Geometer: The Sexual Universe of "Finnegans Wake"*. Carbondale, Ill.: Southern Illinois University Press, 1969.
- Tidall, William York. *A Reader's Guide to "Finnegans Wake."* London: Thames and Hudson, 1969.